

日本映画におけるダンスシーンの 位置付け・特性とその変容

スポーツ文化研究領域

5016A009-2 内田 一良

研究指導教員：杉山 千鶴 教授

1. はじめに

日本映画においては、1890年代末より正面からの定点撮影した歌舞伎舞踊等の記録映画があるが、1920年以降には様々なカメラワークや映像編集を用いたダンスシーン認められる。本研究はダンスシーンを含む映画を通史的に概観し、当該シーンの位置付けと特性ならびにその変容について明らかにするものである。

本研究では1890～2010年代の日本映画を対象に分析・考察を行う。まず文献・資料を元に日本映画の歴史を概観する。次に1890～2010年代の各年代について、ダンスシーンを含む映画各一本を対象に[A. 動作][B. カメラワーク・映像編集][C. 作品構成]の3項目について分析を行う。そしてこの3項目について縦断的に考察する。最後に日本映画におけるダンスシーンの位置付けと特性、そしてその変容を明らかにする。

2. 日本映画の概観

日本映画は1899年より製作が始まる。その後帰山教正(1893-1964)らによる純映画劇運動が起り、1920年代以降は多様な映画が製作されるようになった。1930年代以降はトーキー映画が主流となる。1950年代に入ると映画は全盛期を迎えるが、1960年代以降はテレビの普及とともに衰退の傾向が始まる。2000年代以降は「製作委員会」による製作が主流となり、テレビと共存する道を探り、現在に至る。

3. ダンスシーンの分析・考察

[A. 動作][B. カメラワーク・映像編集][C. 作品構成]の3項目について、各年代の映画におけるダンスシーンの分析考察を行う。

○1890年代『紅葉狩』(1899年,1シーン)A. 上肢を広げる/振る、摺足歩行 B. 全身の構図、定点撮影 C. 前後シーンと無関係、ストーリーを暗示 ○1900年代及び1910年代 該当する映画がなかった ○1920年代『狂った一頁』(1926年,2シーン)A. 上肢を広げる/振る、歩行/ステップ、頭部の回旋 B. 多様な撮影距離、全身/上半身の構図、フォーカス移動、ダンスシーン同士のカット割り C. 前後シーンと無関係、ストーリーを暗示 ○1930年代『マダムと女房』(1931年,2シーン)A. 上肢を振る/伸ばす、ステップ、体幹の直立 B. 多様な撮影距離、全身/上半身の構図、煽り/俯瞰視点、フォーカス移動、ダンスシーン同士のカット割り、特定人物へのフォーカス C. ストーリーに直結、ストーリーの中核 ○1940年代『ハ子さん』(1943年,3シーン)A. 上肢を広げる/伸ばす、ステップ、頭部の回旋、体幹の直立 B. 多様な撮影距離、全身/上半身の構図、煽り/俯瞰視点、フォーカス移動、ダンスシーン同士のカット割り、特定人物へのフォーカス C. 前後シーンと無関係、ストーリーから独立 ○1950年代『カルメン故郷に帰る』(1951年,4シーン)A. 上肢を広げる/振る、歩行/ステップ、体幹の直立 B. 多様な撮影距離、全身/上半身の構図、煽り/俯瞰視点、フォーカス移動、ダンスシーン同士のカット割り、特定人物/観客へのフォーカス C. ストーリーに沿う、ストーリーから独立、エンディングでの使用 ○1960年代『ニッポン無責任時代』(1962年,3シーン)A. 上肢を広げる/振る/伸ばす、歩行/ステップ、頭部の回旋、体幹の直立 B. 多様な撮影距離、全身/上半身の構図、煽り/俯瞰視点、フォーカス移動、ダンスシーン同士のカット割り、特定人物/観客へのフォーカス C. ストーリーに沿う、ストーリーから独立、エンディングでの使用 ○1970年代『ピンク・レディーの活動大写真』(1978年,3シーン)A. 上肢を広げる/振る/伸ばす、歩行/ステップ、頭部の回旋、体幹の直立 B. 多様な撮影距離、全身/上半身の構図、

煽り/俯瞰視点, フォーカス移動、ダンスシーン同士のカット割り, 特定人物/観客へのフォーカス C. ストーリーに沿う, ストーリーから独立, エンディングでの使用 ○1980年代『愛情物語』(1984年, 8シーン) A. 上肢を広げる/振る/伸ばす, 歩行/ステップ, 頭部の回旋, 体幹の直立 B. 多様な撮影距離, 全身/上半身の構図, 煽り/俯瞰視点, フォーカス移動、ダンスシーン同士のカット割り, 特定人物/観客へのフォーカス C. ストーリーに沿う, ストーリーから独立, エンディングでの使用 ○1990年代『Shall we ダンス?』(1996年, 5シーン) A. 上肢を広げる/伸ばす, 歩行/ステップ, 頭部の回旋, 体幹の直立 B. 多様な撮影距離, 全身/上半身の構図, 煽り/俯瞰視点, フォーカス移動、ダンスシーン同士のカット割り, 特定人物/観客へのフォーカス C. ストーリーに直結, ストーリーの中核, エンディングでの使用 ○2000年代『フカール』(2006年, 5シーン) A. 上肢を広げる/振る/伸ばす, 歩行/ステップ, 頭部の回旋 B. 多様な撮影距離, 全身/上半身の構図, 煽り/俯瞰視点, フォーカス移動、ダンスシーン同士のカット割り, 特定人物/観客へのフォーカス C. 前後シーンと無関係, ストーリーから独立, エンディングでの使用

4. 各年代の縦断的考察

[A. 動作] 上肢は1930年代を除く各年代に広げる動作が、1940・1990年代を除く各年代に振る動作が、1960年代以降に伸ばす動作が確認できた。下肢は、各年代に歩行系動作が、1920年代以降にステップが確認できた。頭部の回旋動作は1950年代以外、体幹の直立は1920・2000年代以外確認できた。

[B. カメラワーク・映像編集] カメラワークについて、1920年代以降は撮影距離が多様であり、各年代で全身、1920年代以降に上半身を映す構図が確認できた。各年代で目高視点が、1940年代以降に煽り・俯瞰視点が確認できた。1920年代以降にカメラのフォーカス移動が確認できた。

映像編集について、1920年代以降はダンスシーン同士のカット割りやカット挿入の他、様々な映像編集が確認できた。1930年代以降はダンサーを除く特定の人物、1950年代以降は観客にフォーカスしたカット挿入が確認できた。

[C. 作品構成] 1930年代を除く1890～1940年代及び2010年代では前後シーンと無関係なもの、1950～1980年代ではストーリーに沿ったもの、1930・1990・2000年代ではストーリーに直結したものが多く確認できた。1890～1920年代ではストーリーを暗示するもの、1940～1980年代ではストーリーから独立したもの、1930・1990・2000年代ではストーリーの中核を担うものが多く確認できた。1950年代以降ではエンディングにダンスシーンが用いられた。

5. おわりに

本研究により1890年代から2010年代の日本映画におけるダンスシーンについて、変容は以下の通り明らかになった。

(1) 動作 1920年代以降の下肢のステップは洋舞が用いられたことによる。1960年代以降は上肢を長くダイナミックに見せるために伸ばす。

(2) カメラワーク・映像編集 1920年代以降は撮影距離の多様化、ダンスシーン同士のカット割りが認められ、ダンスを見つめる視点が多方面に置かれるようになった。1930年代以降はフォーカスやカット挿入から、ダンサーのみならず周囲の人物の心情も捉えるようになった。1940年代以降は撮影の視点が増え、ダンスを如何に見せるかが問われるようになった。1950年代以降は観客にフォーカスしたカットが挿入され、ダンスのみならずダンスを見るという行為もダンスシーンの中に含まれるようになった。

(3) 作品構成 1940年代はストーリーから独立するものが、1930年代並びに1950年代以降はこれに加えてストーリーと関連するものが見られるようになった。また1950年代以降には、エンディングにて用いられるようになり、特に1980年代以降には映画の集大成の役割を担った。